

四中だより

夢に向かって、人生の基礎を築き、大きな翼を育む学校
校訓 自主・自律 協同

新座市立第四中学校学校だより 令和4年 12月1日 第9号
TEL 048-477-6053 URL www.c-niiza.ed.jp/j-daiyon



声を掛けられ、背中を押され

校長 鮫島 弘樹

半径3メートルの範囲内に、彼以外の誰もいません。「えー!」「コラッ」その昔、私の知人が小さく叫んでいた相手は、机の上に置かれたノートパソコンです。

草創期のパソコンは、少し複雑な計算をしようとする、結果が出るまで数秒ほど腕組みして待つことも珍しくありませんでした。気の短い彼は、Enterキーをパシッと力強く叩くのと同時に、「ほら、いけっ!」とパソコンを叱咤激励するのが恒例でした、もちろん、それによって結果が早く出る訳ではありませんが。

今の時期、グラウンドでは体育の授業で長距離走が行われています。自分の体力などに合わせて各自で目標タイムを設定し、2人1組のうち片方の生徒がトラックを走ります。その様子を見に行くと、走っていない方の生徒たちが力走を続けるペアに向かって、次々と声を掛けていました。「いいペースだよ!」「頑張て!」「少しペースを上げていこう!」

長距離走だけでなく、教室での授業中も、同じような光景を見ることがよくあります。少しつまづいている生徒に対し、周囲の生徒がさり気なく声を掛けて一緒に考えている場面や、やや投げ出し気味の生徒に対して、トントンと軽く背中を叩いて「ほら、やってみようよ」と声掛けしている場面などです。グラウンドで聞かれる大きな声と質は異なりますが、どちらも仲間を励まし、一緒に向上していこうという気持ちが込められているように感じられます。

パソコンなどと異なり、私たち人間の場合、周囲から励まされることによってまるで背中を押されるかのように、持っている能力をさらに発揮できたり、やる気が増してきたりするものです。

中東のカタールでは、今まさに、FIFAワールドカップが行われています。日本代表の森保一監督は、7月に行われた韓国との試合に3-0で勝利を収めた後、次のように語っていました。「応援による後押しで、苦しいときにひと踏ん張りできた」「戦うメンタリティーや気持ちを上げてくれるのは、サポーターの声出し応援だと、改めて感じさせてもらった」

新型コロナウイルス感染症の影響で、長らく無観客や無声援の試合が続いていました。韓国戦は、久々に声を出しての応援が許可された試合だったのです。

学生時代も、社会人になってからも、乗り越えるべきハードルの高さに「キツイなあ」「苦しいなあ」と感じる場面は少なからずあるものです。今のうちに、「仲間の励ましもあって、やり遂げられた」という経験をできるだけ多く積んでおくことが、将来のたくましさや、チームの一員として大きな力を発揮する素地につながっていくはずです。

学校行事のような特別な場面に限らず、日々の授業や生活の中でも、そうした体験を少しずつ積み重ねて欲しいものです。そのような教育活動を、意図的に展開していきたいと考えています。